

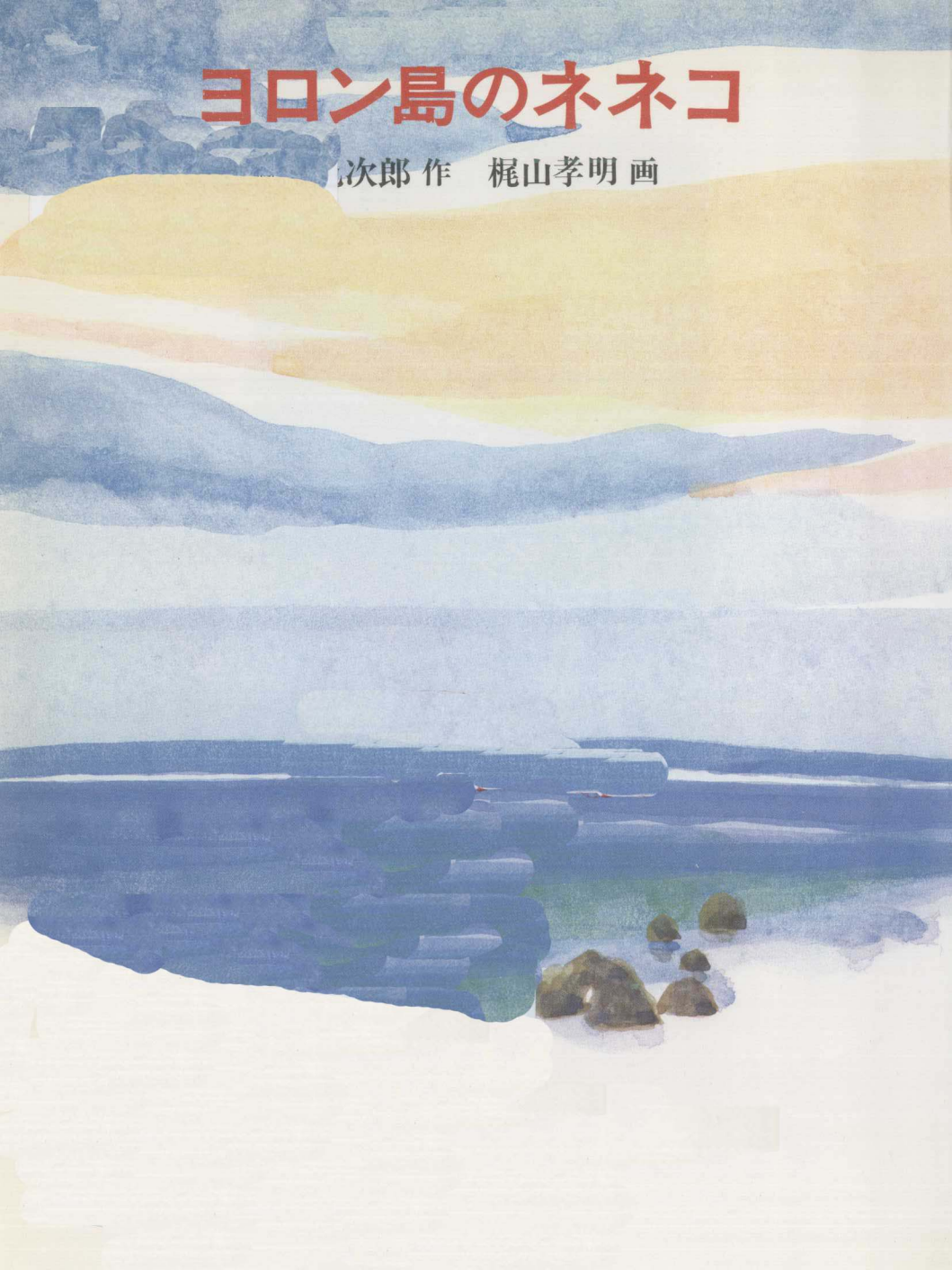
ヨロン島のネネコ

一色次郎 作 梶山孝明 画



ヨロン島のネネコ

次郎 作 梶山孝明 画



ヨロン島のネネコ



著 者 いっ し き じ ろ う
一 色 次 郎
発行者 岡 本 陸 人
印 刷 新興印刷製本株式会社（本文）
錦明印刷株式会社（オフセット）
製 本 株式会社難波製本
発行所 株式会社 あかね書房
東京都千代田区西神田3-2-1 〒101
電話 03(263)0641〈代〉
振替 東京 3-64150

1979年11月15日第1刷

NDC 913

8393-16713-0027

一 色 次 郎

ヨロン島のネネコ

あかね書房 1979

224p 21cm（あかね創作児童文学13）

© 1979 J. Isshiki

著者との契約により検印なし
落丁・乱丁本はおとりかえします
定価はカバーに表示してあります

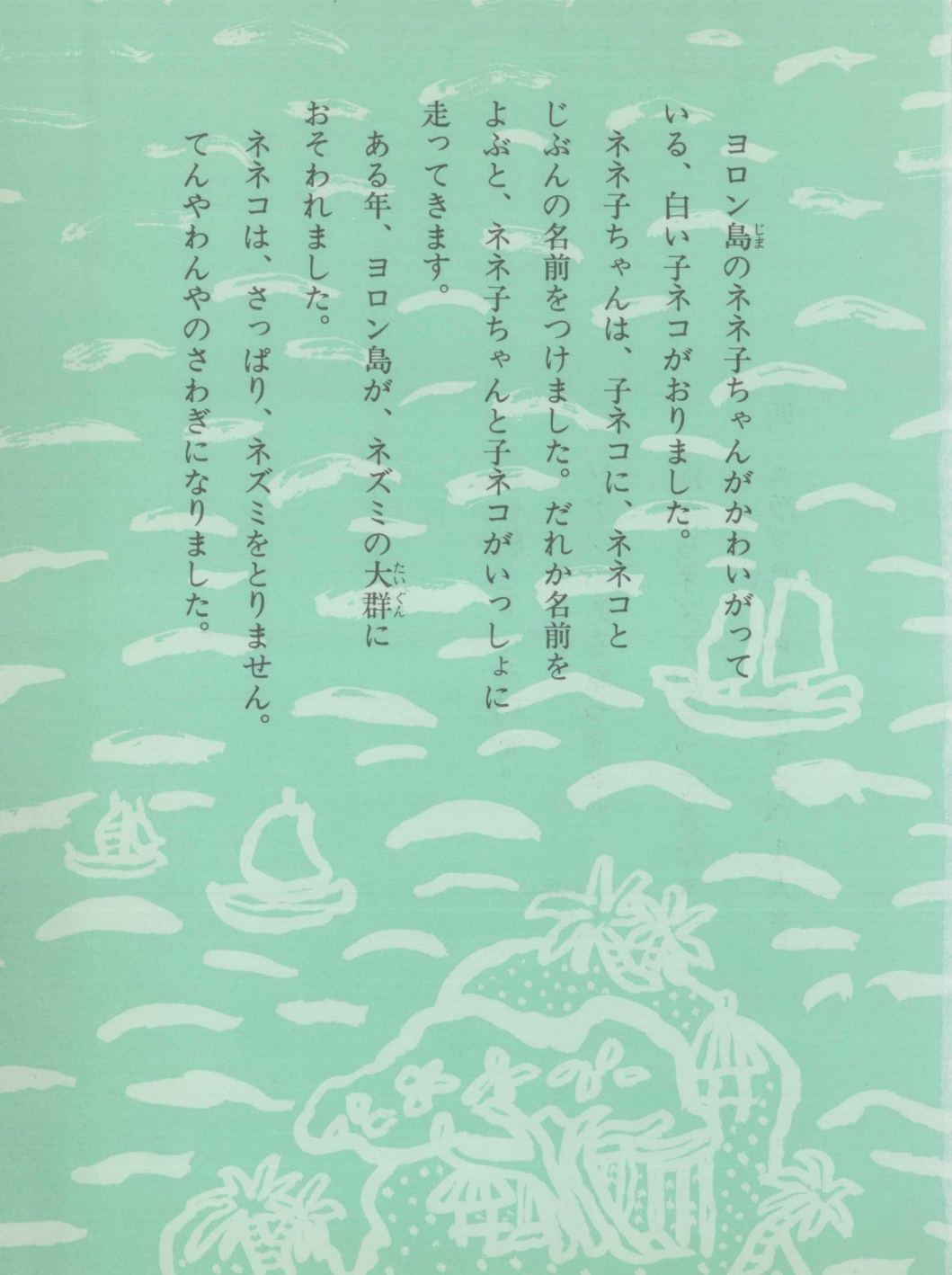
ヨロン島じまのネネ子ちゃんがかわいがつて
いる、白い子ネコがおりました。

ネネ子ちゃんは、子ネコに、ネネコと

じぶんの名前をつけました。だれか名前を
よぶと、ネネ子ちゃんと子ネコがいつしよに
走ってきます。

ある年、ヨロン島が、ネズミの大群たいぐん
おそわれました。

ネネコは、さっぱり、ネズミをとりません。
てんやわんやのさわぎになりました。



もくじ

一 赤い帆とドツキ弓ゆみ＊6

二 ソテツのある原っぱ＊25

三 海からネズミがやってきた＊50

四 エラブ島じまからきたヤンバル人＊83

五 あくび教室＊

113

六 兄弟島きょうだいじまの探検たんけん＊

142

七 ヨロン島じまの四本柱しろうの城＊

178

ネズミが泳ぐ話 — あとがき — ＊

218

そうてい・さしえ／梶山孝明

著者紹介

一色次郎

(いっしき じろう)



一九一六年、鹿児島県の沖永良部島に生まれる。少年時代より作家を志す。一九六七年、幼い日に死別した母の思い出を描いた「青幻記」で太宰治賞を受賞。一九七四年、「東京大空襲」の記録を出版し、菊池寛賞を受賞。小説、随筆、児童文学に、第一線で活躍中。

画家紹介

梶山孝明

(かじやまたかあき)



一九三三年、東京に生まれる。新聞、雑誌、ポスターなど広告宣伝の仕事を経て、以後、児童図書のイラストに専念。作品に、「ウフフ、アッハハ」「鬼を飼うゴロ」「ネコと茶がまのふた」「草なめどんべえ」ほか多数がある。

ヨロン島のネネコ

一色次郎作 梶山孝明画



一 赤い帆とドツキ弓

ユリの浜は、ヨロン島でいちばん美しいところです。

ヨロン島は、亜熱帯のあたたかい小島です。南にオキナワ本島、北の水平線にはオキノエラブ島がかすんで見えます。

このヨロン島は、鹿児島県大島郡の中にありますが、むかしからオキナワの影響を強くうけていますので、風俗や習慣が本土とはかなりちがいます。それに、熱帯地方に近いので、岸にはヤシやパイナップルの木がしげり、海にはさまざまな形をしたサンゴがはえ、すきとおった海水の中を色あざやかな熱帯魚が泳いでいます。本土とは、ようすのちがう別天地です。

いまからちょうど百年近いむかしの、春先のある晴れた日のことです。このユリの浜に一そうのくり舟がつかまりました。



くり舟は、大木をくりぬいてつくります。これだけでは舟としては小さくて使えないので、板をつぎたして帆があげられるようにしてあります。風がないときは、帆柱をたおして、ろやかいでこぎます。おもに、漁師が沖へ出て魚をとったり、近くの島じまを売り歩いたりするのに使いました。この舟は、沖にいてもすぐにわかります。波がしらに乗って、浮いたり沈んだりしていても赤い帆が目立ちます。遭難してもすぐにわかります。そのためでしょうか、帆に使う布をブタの血で染めて、まっ赤に仕上げます。そのくり舟が一そう、ヨロン島のユリの浜につきました。

くり舟には、漁師が一人乗っていました。もう、年よりです。髪の毛もあごひげもまっ白です。長くのばしているわけではありませんが、日やけてまっ黒な肌、白く光っています。年よりでもからだはたくましく、帆やかいでくり舟をかるかとあやつることができます。

老人のくり舟は、へさきにかわったものがつてあります。鉄砲と弓をいっしょにしたような形の道具です。ドッキ弓といえます。このあたりの島じまは、むかしよく海賊船におそわれました。そのようなときに、島の男たちはこのドッキ弓で敵をふせぎました。いくさの道具です。つるに矢をつがえてはなつと、遠くまでとびます。いまは武器として用いることはありませんが、くり舟のお守りとしてたいせつにあつかわれています。めつき

り少なくなつて、いまではドッキ弓のあるくり舟は、めずらしくなりました。網をつくる糸で、へさきにしっかりとゆわえてあります。

くり舟の底がやがて砂地につくと、漁師はいかりを投げて帆をおろしました。くり舟は波にゆられ、いったんなぎさにへさきをのせかけましたが、引き波にもどされ、流れようとするところをいかり綱に引きとめられました。いかり綱は、くり舟のへさきと水中の砂地を力強くむすびます。年おいた漁師は、くをこわきにかかえ、くり舟をおりました。水の中を歩いて砂浜へあがります。浜は、広く明るいばかりで、人のすがたはありません。

漁師は、そのまま村の方角へ歩いていきます。

くり舟には、舟をこぐかいのほかに、海にもぐつて魚をつくもりや綱、それに水をつめた竹筒というようなものが、どものほうにつんでありました。漁師のうしろすがたが、砂浜から見えなくなりました。すると、その荷物のかげから、ネズミが一匹出てきました。

あまり大きくはありません。黒いネズミです。頭が小さく、口がとがつて、まるい耳をしています。目だつところといえは、しっぽが太くて長いこと、そのしっぽにもばらばらと毛がはえていました。

ネズミは、荷物のかげで、ちよつとのあいだだけじつとしていました。鼻をつきあげて、においをかぐようなそぶりをしています。二足三足前へ出ていきました。やはり、鼻

がひくひくうごいています。口はむすんでいます。黒い目はなにを見ているのかうごきません。瞳が半分浮き出たような出目で、ガラス玉のようにつめたく光っています。ネズミは、もういちど前へ出ました。荷物の上に乗っかっています。人間のように、きよろきよろと、まわりを見ません。ただ、いっしんに空気の中のおいをかいています。ネズミがこわいのは、人間だけではありません。空からねらうものもあります。ヘビやけものに食べられることもあります。だから、用心ぶかく、まわりのようすをうかがっているのです。

ネズミは、にわかにいそがしくうごきはじめました。荷物の上から、くり舟のふちへかるくうつります。おどろいたのはそれからあとです。ぜんぜん立ちどまりません。へさきからいかり綱へとびうつり、そのまますべりおりるようかけおりていきます。いかり綱の先は水の中です。ネズミは海にとびこむ形になりましたが、おどろいたようすがありません。鼻先をあげ、口をむすび、みじかい足で水をかいて泳いでいきます。砂浜までわずかな距離です。引き波にもどされたように見えましたが、つぎの波におしあげられて水からはなれました。それからあとはいっさんに岩かげへ走ります。まるで、通いなれた道をいくようです。たちまち、見えなくなりました。

岩かげに走りこんだネズミは、それからどうしたでしょう。

舟の中にいたときのように、じっとしています。それから、岩にそって砂地をしばらく

かけていって、また、まわりのようすをうかがいます。

砂浜すなはまからマツ林のほうへ、岩はとびとびにつづいています。ネズミは、その岩かけをつたつて陸地りくちへあがっていきます。けれども、何番めかの岩かけでまたうごかなくなりしました。砂地すなにからだをかがめて、用心ぶかい姿勢しせいになりました。すると反対側はんたいがわの岩かけから、おなじようなネズミが一匹ひき出てきました。

二匹ひきのネズミは、しばらくむかいあっていました。どちらのひげも、びくびく、うごきます。にらみあつたまま、おたがいのにおいをかぎあっているようです。

舟ふねのネズミは、マツ林へ早くいきたい、そんなようすが見えます。いきなりとび出しました。すると、行く手に、また島のネズミが出てきました。こんどは二匹です。砂をけちらしながら、すごいいきおいでかけてきます。舟のネズミは横つとびに逃げながら、三匹の間をぬつて、マツ林のほうへいこうとしましたが、そのいく先さきへ島のネズミが走りまわつてじゃまをします。とうとうつかまりそうになりました。舟のネズミは、鳴き声をたてて、むきをかえました。

舟のネズミは、砂浜をなぎさへむけてかけおりていきました。島のネズミたちは、あとを追います。舟のネズミは、波に乗り、いかり綱づなをかけあがつて、もとのくり舟にもどっていきました。島のネズミたちは、波うちぎわまで追っていましたが、くり舟に逃げこ



んだところを見ると、また岩かげへすばやくもどっていききました。

それから、しばらく時間がたちました。さっきの漁師が、からっぽになったびくをかかえてもどってきました。一人ですから、しゃべる相手もいません。だまっていかりをあげると、かいでこぎながら水ぎわをはなれ、やがて、赤い帆に風をはらませてゆっくり沖へ出ていきました。

くり舟がもどりついたところは、オキノエラブ島のヤコモというところでした。漁師は、ヨロン島のユリの浜についたときのように、いかりを投げて帆をおろし、びくのほかにこんどはかいをかついで村へ帰っていききました。そのあとから、ネズミもおかへあがりました。陸のことを海ではたらく人たちは、おかといいます。

舟のネズミは、オキノエラブ島からヨロン島までの海を往復したことになります。

2

ヨロン島の船着場には、チャハナというおもしろい名前がついています。まわりに、茶畑の多いところのようです。このチャハナの船着場を遠くに見おろす島の斜面に、小学校があります。カヤぶき屋根の小さな建物で、教室は一つだけです。大きな子ども、小さな子ども、ここでいっしょに勉強します。生徒は、みんなで三十人ばかりいます。机が

四列しりゅうにならべてあって、小さな子どもから順じゆんにこしかけるようになっていきます。両側りょうがわに窓はありますが、ガラス戸はついていません。上におしあげて、棒ぼうでささえるかわった板戸いたどです。しとみ戸とどといっています。

学校の敷地しきちの中には、ほかに建物たけものが、三つあります。教室くわうしつの裏手うらてに、母屋おもやが一つ、先生せんせいの住いすまいです。

そのとなりに、小屋が一つ、こちらは食べものをつくったり食べたりするところ、つまり食堂じきやうです。島ではく、屋いといっています。すすけて黒いから黒屋くろやがくり屋くりやになったものです。そのほかに、もう一つかわったつくりの建物たけものがありました。四本柱よんぽんちゆうの上に、屋根裏やねうらみたいな部屋へやがついています。窓はありません。地面じめんに近いところに板床いたどこがあります。竹馬式たけうましきの建物たけものでした。これは高倉たかくらといっています。屋根裏やねうらが倉くらになっています。島はふだんからネズミが多いので、いつのまにかこのようにつくりになりました。その高倉たかくらに二とおりあります。ふつうは四本柱よんぽんちゆうです。それよりひとまわり大きい六本柱ろくぽんちゆうの倉くらもあります。中には、コメ俵だわらをはじめ、いろいろな穀物こくもつがおさめてあります。

母屋おもやには、四人の家族かぞへが住すんでいました。男の子が一人、女の子が一人、それに両親りやうしんの四人です。お父さんだけでなく、お母さんもこの小学校の先生せんせいでした。

お父さんの先生せんせいは猛たけしという名前なです。でも、島では物知りのモー先生せんせいといったほうがわ

かりが早いでしょう。鹿児島^{かごしま}の獣医^{じゆうい}さんのところでウシやウマの病氣のことを勉強してきましたから、島のけものについてのことなら、たいてい知っています。だから、物知りのモー先生です。でも、モーはウシがモーと鳴くから、モーとつけたわけではないでしょう。先生の名前はモーレッツのモーです。モー先生は、黒いふちのまんまるなめがねをかけています。

島にはあちこちに部落^{ぶらく}があります。お母さんは、チャハナの生まれです。ハナの字をとって、花子と名前がついています。だから花子先生です。はじめ子どもたちは、花子先生のことをおばさんといいました。でも、なんとなくおかしいので、モー先生が注意しました。それから女先生です。モー先生のこと、とうぜん男先生になりました。子どもたちが家に帰って学校のことを話すとき、男先生から、きょうはこんなことを習った、あるいは、女先生からこんな話を聞いたといったあんばいです。学校には、男先生と女先生が一人ずついることになります。

子どもは、男の子が五郎^{ごろう}で妹はネネ子^{ねねこ}といっています。この男の子はどうしてか理屈^{りくつ}っぽいので、ギロンずきの五郎ちゃんといわれています。妹はいつも白い子ネコをだいているので、ネコずきのネネ子ちゃんです。ネネ子というのもほんとうの名前です。島の人たちは、ひまだから、考えすぎてこった名前をつけます。最初^{さいしよ}に生まれても五郎です。大きく